

研究

2023. 12. 27

研究は、間口を狭くして、一つのことをじっくり深くやるのがいい。そう教わった。若い人にも、そう伝えている。できれば、誰もタッチしていないような分野がよい。本来、それが研究である。教員の場合は、研究という言葉を使っているが、研究もどきが多い。かく言う、私もそうである。

今までは、広く浅くの人生だった。これからは、本来の研究というものをしたくなってきた。一つのことを突き詰めるのである。太宰治の研究、芥川龍之介の研究、夏目漱石の研究などが浮かぶ。自分にとっては、突き詰めているつもりでも、世の中にとっては、新分野にはならないだろうことはわかっている。新分野を開拓するということは、それまでの研究をすべてわかっていなければならないということである。素人にとっては、至難の業である。

近所のお寿司屋さんに行く。カウンターに座ると、目の前に本が並んでいる。その中に、地元の郷土史の本がある。これがおもしろい。元来、社会好きの私にとっては、魅力的な本である。飯坂温泉の公衆浴場に行く。お湯が熱い。休憩スペースに、福島市史の本がある。これもおもしろい。

だからといって、郷土史家になるつもりはない。すでに、その道の達人がいる。方向を変えて、イタリア研究家というのはどうだろう。いつの間にか、我が家には、おびただしい量のイタリア関係の書籍が存在している。この道にはライバルが多い。この方面の書籍やネットの情報に困ることはないほどである。

単純に、シンプルに、イタリアがおもしろい。ある程度の知識ならば、すでにもっている。それをベースに、もっと詳しくなりたい。どちらかと言えば、イタリア共和国という国というよりも、一つ一つの都市の歴史である。都市国家の衰亡である。加えて、古代ローマ史にルネッサンスもある。話題に事欠かない長靴の国である。

今あるイタリアに関わる書籍や資料を読み直すだけでもかなりの作業になる。読みっ放しはいけないので、本は出さないが、ブログに記事として載せるぐらいのことはしたい。以前、自分のブログにイタリアの街シリーズをアップしたことがあった。けっこうなアクセス数があった。もっと多かったのは、ソフトテニスの指導法に関してである。それだけ、ニーズがあるということだろう。

何年先になるかはわからないが、イタリアに3か月間滞在すると決めている。イタリア研究は、その予習でもある。事前に、その土地の歴史などの知識があれば、見える景色も違ってくるだろう。それを楽しみにしている。問題は、それまで健康でいられるかである。現地に行けば、1日にかなりの距離を歩くことになる。それだけの気力と体力を養っておかなければならない。実地調査も、研究の一環である。